

「俳句を通して心豊かな日々を」

前半

1. 俳句へのお誘い

講師自己紹介—講師3名の俳句への思い披露

山本俊雄

勝瑞高春

名田みや女

2. 俳句とは

17音のなかで季節の美や人の心を表現する世界で最も短い定型詩である。

俳句が生まれるまで

古代—奈良時代 **和歌**

古くから歌い継がれ、奈良時代に五・七・五・七・七という短歌の定型ができた。中国の漢詩に対して 日本(大和)の和歌

平安時代 **連歌**(和歌)

前半の五・七・五と後半の七・七を二つに分け、複数の人が詠んだ歌を合体させて作る和歌。

室町時代 **連歌**(俳諧)

貴族のものであった平安からの連歌(和歌の連歌)に対する庶民の連歌。

和歌の連歌に(俳)と戯れ(諧)といった俗の要素が加わったものが「俳諧」。

元禄時代 **連句**

「連句」と名前が変わるが、俳諧の連歌のこと。複数の人で五・七・五と七・七の短詩を詠み、作りあげていく方法は連歌と同じ。

元禄時代 **発句**

連歌の第一句にあたる五・七・五のこと。松尾芭蕉は元禄時代に発句だけ独立して詠んでいたため、**俳句の祖**と呼ばれる。

明治時代～**俳句**

俳諧の連歌の発句を独立させ、五・七・五嶽で成立させた。正岡子規によって「俳句」として確立された。

音数の数え方のきまり

ようおん
拗音—「ゃ」「ゅ」「ょ」などの小さい文字を使った仮名はまとめて1音で数える。

例 教室=「きよ・う・し・つ」で4音 町長=「ちょ・う・ちょ・う」で4音

車中=「しゃ・ちゆ・う」で3音 丘陵=「きゆ・う・りよ・う」で4音

促音—^{そくおん}「っ」で表す詰まった音が入った仮名のこと。詰まる音は発音する時に一拍置くため、2音で数える。

例 すっぱい=「す・(っ)・ぱ・い」で4音。 さっぱり=「さ・(っ)・ぱ・り」で4音。 あっぱれ=「あ・(っ)・ぱ・れ」で4音。

長音—^{ちようおん}伸ばす音が入った仮名のこと。「おかあさん」の「あ」「おとうさん」の「う」

「ショール」の「ー」等

例 シューズ=「しゅ・う・ず」で3音。 兄さん=「に・い・さ・ん」4音。

撥音—^{はつおん}「ん」で表す、はねる音が入った仮名のこと。前の音とくっついた状態で撥音するが、1音で数える。

例 本気=「ほ・ん・き」で3音。 神前=「し・ん・ぜ・ん」で4音。

俳句の前提・定型

五音・七音・五音この中に季語が入ると言うのが一般的な認識。

五(上5)七(中7)五下5)の定型

「事前学習としての」俳句用語

字余り 字足らず 句またがり 破調 季重ね 等

定型— 定まった決まり

有季俳句— 季語(季節のわかる語)のある句

無季俳句— 季語(季節のわかる語)のない俳句

字余り— 音の数が五七五の17音数より多くなっている

字足らず— 音の数が五七五の17音数より少なくなっている

句またがり— 言葉の意味が五七五の切れ目に合致していない手法。

効果としては新鮮な印象を与える。

破調— 定型は五七五の韻律(リズム)で成り立っているが、このリズムでない調子の句

季重ね— 季語は一つがきまりであるが、季語が二つ、三つとあること。

例— 目には青葉山ほととぎす初鯉— 山口素堂

自由律— 5・7・5の定型に囚われず句を作ること。

例— 分けいっても分け入っても青い山— 種田山頭火

切れ— 17音という短い中に「切れ」を入れることで、俳句に広がりや奥行き、強調、余韻等の効果を持たせるテクニックの一つ

「—や」「—かな」「—けり」「—なり」「—たり」「—こそ」等。

後半

会場(木岐夢ギャラリー)内外吟行

場所—JR 木岐駅徒歩 1～2 分

旧廻船問屋の古民家(天保 6 年建立 1835 年)

- 特徴
1. 天井—屋久杉使用
 2. 床—3 間床 床柱は鉄刀木
 3. 掛け軸—書は貫名海屋(別号—菘翁)

江戸後期の書家。幕末の三筆の一人。徳島の人。

俳句作品の添削(推敲)

シルバー大学俳句講座での 1 回目の作品数点列記して講評
(数点添削—作者の思いや意図を尊重することを主眼に置いて)

俳句をはじめようとする貴方が用意するもの

歳時記(必需品)—四季を表す時候、天文、地理、人事、宗教、動物、植物などの
季語を集め、解説し、いくつかの例句が収まっている。

句帳—(書き写せる紙と筆記具)

辞典類—国語辞典、その他辞典

(電子辞書は便利なツールと言える—歳時記も入っている)